

会員限定

2022年11月度合同研究会

金融マーケティング研究会


金融システム研究会

2022年11月7日～11月18日

# キャッシュレス決済を巡る最新動向と ビジネスモデル転換の必要性

講師：浅見 淳

株式会社 きんざい 「月刊 消費者信用」編集長

 金財情報システム 研究会事務局

# CONTENTS

---

## 目次

### キャッシュレス決済を巡る最新動向とビジネスモデル転換の必要性

Slide 2 本日のアジェンダ .....	4
1. 最新の統計から見たペイメント市場 .....	6
Slide 3 キャッシュレス市場の規模 .....	6
Slide 4 取扱高の年間増減額比較 .....	6
Slide 5 コンビニでの決済手段別決済比率 .....	8
Slide 6 デビットの躍進とクレジットの巻き返し .....	8
Slide 7 リボ・分割、キャッシングの低迷と回復 .....	10
Slide 8 消費者金融会社のKPIの推移 .....	10
Slide 9 カード決済額の推移 (Custella Trend) .....	12
Slide 10 旅行分野の回復の遅れ (Custella Trend) .....	12
Slide 11 カード市場全体が回復基調に .....	14
Slide 12 PayPay の事業規模 .....	14
Slide 13 PayPay のマネタイズ戦略 .....	16
Slide 14 NTTグループの戦略 .....	16
Slide 15 NTTドコモの決済サービスの実績 .....	18
Slide 16 KDDI の戦略 (金融クロスユース) .....	18
Slide 17 KDDI が描くプラットフォーム事業 .....	20
2. 行政の施策と市場に与える影響 .....	20
Slide 18 KDDI の決済サービスの実績 .....	20
Slide 19 ここまでのまとめ① .....	22
Slide 20 2022年度の成長戦略 .....	22
Slide 21 キャッシュレス検討会のとりまとめ .....	24
Slide 22 公正取引委員会実態調査報告書 .....	24
Slide 23 11月末に公開へ .....	26
Slide 24 インターチェンジフィー公開の影響 .....	26
Slide 25 「キャッシュレスの将来像に関する検討会」 .....	28

Slide 26 「セキュリティ対策強化検討会」	28
Slide 27 検討会設置の背景	30
Slide 28 ビジョンに示された方向性	30
Slide 29 割賦販売法の枠組み	32
Slide 30 想定される結論	32
Slide 31 EMV 3-D セキュアの特長	34
Slide 32 賃金に関する現行の規制	34
Slide 33 デジタル給与をめぐる動き	36
Slide 34 デジタル給与の制度案の骨子	36
Slide 35 全銀システムの資金移動業への開放	38
Slide 36 少額送金プラットフォーム「ことら」	38
<b>3. デジタル化が変えるビジネスモデル</b>	<b>40</b>
Slide 37 銀行への再調査	40
Slide 38 ここまでのまとめ②	40
Slide 39 決済に求められる DX	42
Slide 40 UI/UX の分断の例	42
Slide 41 分断解消の例①	44
Slide 42 Amazon Go から学ぶ	44
Slide 43 分断解消の例②	46
Slide 44 Embedded Payment の可能性	46
Slide 45 Embedded Payment の仕組み	48
Slide 46 Embedded Payment の実践例	48
Slide 47 カード会社独自の経済圏創出の動き	50
<b>◆ 質疑応答</b>	<b>52</b>



月刊消費者信用編集長の浅見でございます。

本日は、キャッシュレス市場、ペイメント市場と言ってもいいと思いますけれども——に関連する様々な動きを紹介させていただきながら、競争環境が今激しく変わってきております。そういう中で、既存の決済事業者、銀行ですとかカード会社がどうやって新興勢力に対抗していけばいいのかということを考えてみたいと思っております。

では、まず資料を立ち上げさせていただきます。

それでは、始めさせていただきます。

## **Slide 2 本日のアジェンダ**

まず1枚めくっていただきまして、本日のアジェンダですけれども、1部は、いろいろな統計データから、今の市場の現状を見てみたいと思っております。2部は、特に行政の動きを見ながら、それが事業者にどういう影響を与えていくんだろうかということを見てみたいと思っております。それと、第3部が、では、その既存の事業者がどのような戦略を打ち出せば競争力を維持して、さらに強化できるのかということを考えてみたいと思っております。

金融マーケティング研究会  
金融システム研究会

2022年11月度

# キャッシュレス決済を巡る最新動向と ビジネスモデル転換の必要性

月刊消費者信用  
The Consumer Credit Monthly

編集長 浅見 淳

1

## 本日のアジェンダ

1. 最新の統計から見たペイメント市場
  - ①ペイメント市場の勢力図の変化
  - ②コロナ禍でダメージを受けた与信ビジネスの現状
  - ③コード決済の伸長とコード決済事業者（通信キャリア）の戦略
2. 行政の施策と市場に与える影響
  - ①銀行のコスト構造と既得権に切り込む公正取引委員会
  - ②インターチェンジフィーの公開を迫る経済産業省と公正取引委員会
  - ④デジタル給与の解禁のための制度設計を進める厚生労働省
3. デジタル化が変えるビジネスモデル
  - ①商取引におけるUI/UXの分断などのストレス
  - ②ストレスを解消するリアルとネットの融合強化
  - ③ECのUI/UXのリアルへの展開
  - ④Embedded Paymentの可能性

2

## 1. 最新の統計から見たペイメント市場

### Slide 3 キャッシュレス市場の規模

まずデータを見ていきたいと思います。キャッシュレス市場の規模ということなんですが、見ていただきたいのは、クレジットカード、デビットカード、電子マネー、コード決済、その21年の暦年ベースの取扱高ということで、それを合計しますと94兆9,591億円になっています。民間最終消費支出に対して32.5%、ですから、キャッシュレス決済比率を約4割にするという目標を政府が掲げていますけれども、今32.5%まで来ているということでもあります。

クレジットカードの構成比は85.3%で、昨年というか、20年よりも若干下がってはいるんですけども、それでもかなりの占有率だということです。あとポイントになるのは、電子マネーが、日銀が統計を取ってから初めてマイナス成長になりました。逆に、コード決済は75.0%増ということで、まだ非常に高い成長を続けていて、金額でも、電子マネーの5兆9,000億をコード決済は7兆3,000億ということで、初めて上回りました。20年はまだ電子マネーのほうが多かったんですけども、21年はコード決済が上回ったということで、昨年は大きなターニングポイントではなかったかと思われるわけです。

### Slide 4 取扱高の年間増減額比較

これは、取扱高の年間増減額、つまり、21年の取扱高が20年対比でどれだけ増えたのかを決済手段別に見たものでありますけれども、クレジットカードが6兆5,000億円伸びた。それに対して、コード決済は3兆1,000億円伸びたということで、クレジットカードが約倍伸びたんです。

ところが、この20年の青いほうの数字を見てみると、クレジットカードは1兆円しか増えなかったのに、コード決済が3兆円増えたわけです。コロナ禍で、T & Eというんですか、トラベル&エンターテインメントという分野、ここはクレジットカードが得意とする市場ですが、その消費が縮小、激減してしまったということもあって、クレジットカードは大変苦戦を強いられました。しかし、21年はコード決済を上回る増加額を示して、クレジットカードの成長力を取り戻しつつあるという状況にありました。

## キャッシュレス市場の規模

(単位: 億円、%、%ポイント)

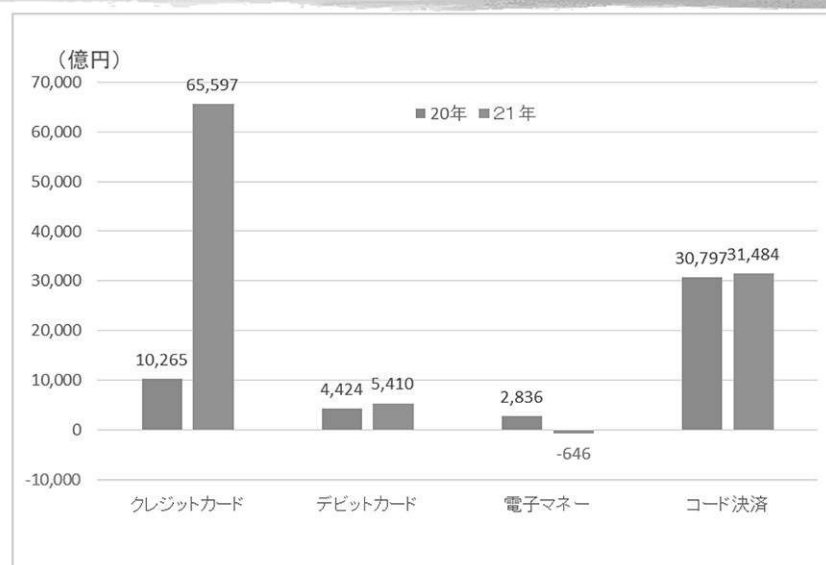
	21年			20年		
	取扱高	増減率	構成比	取扱高	増減率	構成比
クレジットカード(A)	810,173	( 8.8 )	85.3	744,576	( 1.4 )	86.8
デビットカード(B)	26,987	( 25.1 )	2.8	21,577	( 25.8 )	2.5
電子マネー(C)	59,696	( △ 1.1 )	6.3	60,342	( 4.9 )	7.0
コード決済(D)	73,487	( 75.0 )	7.7	42,003	( 274.8 )	4.9
うちクレジットカードからの利用(E)	20,752	( 101.5 )	-	10,299	( 544.5 )	-
合計(E=A+B+C+D-E)	949,591	( 10.6 )	100.0	858,199	( 4.8 )	100.0
民間最終消費支出(F)	2,919,300	( 0.9 )	-	2,894,987	( △ 5.0 )	-
キャッシュレス比率(E/F)	32.5	( 2.9 )	-	29.6	( 3.0 )	-

(注)①カッコ内は前年比増減率(%)。キャッシュレス決済比率は増減実数(%ポイント)。②構成比は年実績に基づく。③コード決済の「クレジットカードからの利用」はクレジットカード及びブランドデビットカード紐付け利用分、クレジットカード及びブランドデビットチャージ分の金額を意味しており、クレジットカード及びデビットカードと重複するため、4つの決済手段の合計値から差し引いた。

(出典)クレジットカードは日本クレジット協会のクレジット関連統計、デビットカード、電子マネーは日本銀行の「決済動向」、コード決済はキャッシュレス推進協議会の「コード決済利用動向調査」、民間最終消費支出は内閣府の「国民経済計算」(8月15日公表の22年4-6月期1次速報値。名目・暦年)。各決済手段の集計方法については、各市場について記述したページの図表の注釈を参照。

3

## 取扱高の年間増減額比較



(注)2021年及び2020年(暦年)の取扱高の前年比増減額。

(出典)3Pの資料と同じ

4



## Slide 5 コンビニでの決済手段別決済比率

先ほど電子マネーをコード決済が上回ったという話をさせていただきましたが、そういう電子マネーからコード決済へのシフトというのを如実に物語っている数字を紹介したいと思います。

これは、キャッシュレス推進協議会が集計している動態調査でありまして、コンビニの大手3社、セブンイレブン、ファミリーマート、ローソンにおけるキャッシュレス決済された金額とか件数について、決済手段別に見た数字であります。コード決済、22年1月から6月の数字を見ますと39.2%あります。電子マネーが40.6%ということでかなり肉薄してきたという状況です。

ただ、19年とか20年を見ますと、電子マネーが65.2%に対し、コード決済が10%ということで、まだ電子マネーが圧倒的に強かったわけです。ところが、電子マネーが毎年10%ぐらいずつシェアを落としていって、逆にコード決済は10%ぐらいずつシェアを伸ばしていって、おそらくこの22年、通年で見た場合は、コード決済が電子マネーを上回る、そういう逆転現象が起きるのではないかと推察されます。件数ベースで見ても、コード決済がかなり肉薄しつつあって、今シェアはほとんど並んでいるということです。

## Slide 6 デビットの躍進とクレジットの巻き返し

それと、コロナ禍の影響という意味では、20年、クレジットカードが非常に落ち込んで、逆にデビットカードが伸びたという現象が起きていたんです。それが今どうなっているかを見てみたいと思います。

これは、Visa だけについて見たものですが、クレジットカードが青いほう、デビットカードがオレンジ色のほうということです。20年は、クレジットカード、全世界の取扱高がマイナス10.0%だったんです。それに対して、デビットカードは11.2%伸びたということで、このとき、デビットカードの取扱高がクレジットカードのそれを初めて抜いたんです。まだ19年というのは、このように全世界の数字を見ますとクレジットカードのほうがデビットカードよりも多いわけですが、20年には、クレジットカードがデビットカードに抜かれてしまった。そういう非常に注目すべき動きがありました。

これは、どういうことかということ、基本的には、コロナ禍があって、先ほど言ったT & Eのような非常に単価の高い高額な消費が落ち込んだということもあり、ク

レジットカードの出番がなかった。日用品を買うのであれば、銀行口座からすぐに落ちるデビットカードのほうがいいだろう。将来収入がどうなっていくかも分からないから、リボを使って債務を増やすよりは、デビットカードで堅実に暮らしていこうという志向が高まったというのが背景にあるのではないかと思います。

それが21年、昨年になるとどうだったかといいますと、クレジットカードは19.0%の伸びを示して、デビットカードは25.4%増ですから、デビットカードの増勢というものは変わらなかったんですけど、クレジットカードも、20年対比ということもあり、反動増が含まれているから、ここの増減率というのは見かけよりも大きくなるということだとは思いますが。それでも19.0%増して、そこそこ伸びました。

それが22年になってどうかということ、この1月から6月までの数字ですけど、クレジットカードは17.7%伸びたのに、デビットカードは5.2%しか伸びていない。デビットカードはもっと伸び代があるのかなと思っていただんですけど、急に伸びにブレーキがかかってしまった。マイナスになりはしていませんけれども、ブレーキがかかった形です。金額的にも、ここにありますように、クレジットカードが2兆8,600億ドル、それに対してデビットは2兆8,540億ドル、本当に僅差でありますけれども、クレジットカードがまたデビットカードを上回っているということで、クレジットカードが巻き返す動きが見られます。

この情勢がこのあとどう続いていくかということとはなかなか予断を許さないんですけど、おそらく22年通年ではクレジットカードがデビットカードを抜く、逆転するという現象が起きるのではないかと思います。こういう数字が物語っているのは、コロナ禍で消費が落ち込んだことで、決済サービス全体が打撃を受けたけれども、とりわけクレジットのような与信サービスが大きな影響を受けたということです。

例えば日本のクレジットカードの取扱高を見ても、リボ・分割の取扱高はものすごく減ったんです。全体的な取扱高は何とかプラスを維持したということだったんですけど、リボ・分割はすごく下がってしまった。キャッシングも下がってしまったという中で、足元の数字を見ると、リボ・分割の取扱高も伸びるようになってきましたし、キャッシングも伸びている。対前年同月比で伸びているという状況にあります。反動増で下駄をはいている部分もありますが、その与信サービスから離れていった消費者がだんだんそこに戻ってきている。大型の消費があれば資金需要が生まれるということで、コロナ禍の収束と拡大を繰り返

## コンビニでの決済手段別決済比率

(単位:十億円、%)

	19年		20年		21年		22年(1~6月)	
	金額	構成比	金額	構成比	金額	構成比	金額	構成比
国際ブランド決済	750.7	( 23.6 )	727.0	( 19.0 )	770.3	( 18.7 )	417.4	( 19.4 )
電子マネー決済	2072.9	( 65.2 )	2072.4	( 54.2 )	1857.9	( 45.1 )	874.2	( 40.6 )
コード決済	323.8	( 10.2 )	992.1	( 25.9 )	1455.3	( 35.3 )	846.0	( 39.2 )
その他	32.1	( 1.0 )	32.6	( 0.9 )	35.4	( 0.9 )	18.0	( 0.8 )

	19年		20年		21年		22年(1~6月)	
	件数	構成比	件数	構成比	件数	構成比	件数	構成比
国際ブランド決済	694.0	( 15.4 )	664.8	( 12.7 )	661.4	( 12.0 )	360.3	( 12.6 )
電子マネー決済	3226.2	( 71.5 )	3003.9	( 57.6 )	2647.4	( 48.1 )	1245.5	( 43.6 )
コード決済	514.2	( 11.4 )	1474.9	( 28.3 )	2116.5	( 38.5 )	1216.1	( 42.5 )
その他	75.2	( 1.7 )	70.7	( 1.4 )	75.3	( 1.4 )	37.8	( 1.3 )

(注)調査対象はセブン-イレブン、ファミリーマート、ローソン。

(出典)キャッシュレス推進協議会の「コンビニエンスストアにおけるキャッシュレス決済動向調査」

5

## デビットの躍進とクレジットの巻き返し

Visaのクレジットカード、デビットカードの取扱高の推移

(単位:億ドル、%)

クレジット	2019		2020		2021		2022(1~6月)	
	金額	増減率	金額	増減率	金額	増減率	金額	増減率
全世界	48,900	( 4.0 )	43,990	( △ 10.0 )	52,380	( 19.0 )	28,600	( 17.7 )
アメリカ	20,890	( 6.8 )	19,390	( △ 7.2 )	24,050	( 24.1 )	13,660	( 24.1 )
その他	28,010	( 2.0 )	24,600	( △ 12.1 )	28,330	( 15.0 )	14,940	( 12.5 )

(単位:億ドル、%)

デビット	2019		2020		2021		2022(1~6月)	
	金額	増減率	金額	増減率	金額	増減率	金額	増減率
全世界	40550	( 8.2 )	45080	( 11.2 )	56540	( 25.4 )	28,540	( 5.2 )
アメリカ	19420	( 9.8 )	22310	( 15.2 )	28050	( 25.8 )	14,590	( 5.0 )
その他	21130	( 6.7 )	22760	( 7.5 )	28490	( 25 )	13,930	( 5.2 )

(出典)VisaのIR資料。

6